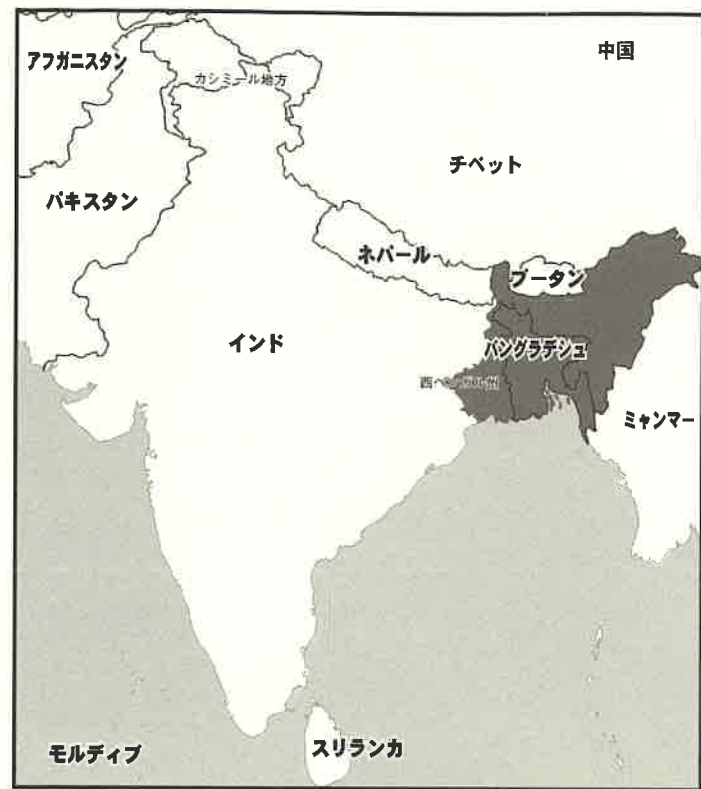




日本がアジアを目覚めさせた  
語り継ぎたい「20世紀の奇跡」インド独立への道

プロビール・ビカシュ・シャーカー 著

ハート出版



南アジアおよびベンガル地方の地図  
 (※濃いグレーの範囲がベンガル地方)

はじめに

安倍晋三首相のインドでの演説から

二〇〇七年八月二二日、インド訪問中の安倍首相(当時)は、インド国会にて「二つの海の交わり」と題する演説を行った。在任中、安倍首相はさまざまな批判にさらされてきたが、バングラデシュ人として私は、この演説を、インド・バングラデシュと日本との関係について、日本の政治家がその歴史的意義を最も明確に、かつ格調高く語ってくれた言葉として、歴史にとどめておきたいと思う。

以下、外務省のホームページから引用する。

本日私は、世界最大の民主主義国において、国権の最高機関で演説する荣誉に浴しました。これから私は、アジアを代表するもう一つの民主主義国の国民を代表し、日本とインドの未来について思うところを述べたいと思っています。

The different streams, having their sources in different places, all mingle their water in the sea.

インドが生んだ偉大な宗教指導者、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda) の言葉をもって、本日のスピーチを始めることができますのは、私にとってこのうえない喜びであります。

皆様、私たちは今、歴史的、地理的に、どんな場所に立っているでしょうか。この問いに答えを与えるため、私は一六五五年、ムガルの王子ダーラー・シコー (Dara Shikoh) が著した書物の題名を借りてみたいと思います。

すなわちそれは、「二つの海の交わり」 (Confluence of the Two Seas) が生まれつつある時と、ところにはかありません。

太平洋とインド洋は、今や自由の海、繁栄の海として、一つのダイナミックな結合をもたらしています。従来の地理的境界を突き破る「拡大アジア」が、明瞭な形を現

しつつあります。これを広々と開き、どこまでも透明な海として豊かに育てていくかと、そして責任が、私たち両国にはあるのです。

私は、このことをインド一〇億の人々に直接伝えようとしてまいりました。だからこそ私はいま、ここ「セントラル・ホール」に立っています。インド国民が選んだ代議員の皆様にも、お話ししようとしているのです。

日本とインドの間には、過去に幾度か、お互いを引き合った時期がありました。

ヴィヴェーカーナンダは、岡倉天心なる人物——この人は近代日本の先覚にして、一種のルネサンス人です——が、知己を結んだ人でありました。岡倉は彼に導かれ、その忠実な弟子で有名な女性社会改革家、シスター・ニヴェーディター (Sister Nivedita) とも親交を持ったことが知られています。

明日私は、朝の便でコルカタへ向かいます。ラダビノド・パール (Radhabinod Pal) 判事のご子息に、お目にかかることとなるでしょう。極東国際軍事裁判で気高い勇気を示されたパール判事は、たくさん日本人から今も変わらぬ尊敬を集めているのです。

ベンガル地方から現れ、日本と関わりを結んだ人々は、コルカタの空港が誇らしくも戴く名前の持ち主にせよ、ややさかのぼって、永遠の詩人、ラビンドラナート・タゴールにしろ、日本の同時代人と、いずれも魂の深部における交流を持っていました。まったく、近代において日本とインドの知的指導層が結んだ交わりの深さ、豊かさは、我々現代人の想像を超えるものがあります。

(中略)

ここで私は、インドが世界に及ぼした、また及ぼし得る貢献について、私見を述べてみたいと思います。当の皆様に対して言うべき事柄ではないかもしれませんが、しかし、すぐ後の話に関連してまいります。

インドが世界史に及ぼすことのできる貢献とはまず、その寛容の精神を用いることではないでしょうか。いま一度、一八九三年シカゴでヴィヴェーカーナンダが述べた意味深い言葉から、結びの部分を引きのお許しください。彼はこう言っています。

"Help and not Fight", "Assimilation and not Destruction", "Harmony and Peace

and not Dissension".

今日の文脈に置き換えてみて、寛容を説いたこれらの言葉は全く古びていないどころか、むしろ一層切実な響きを帯びていることに気づきます。

アショカ王の治世からマハトマ・ガンディーの不服従運動に至るまで、日本人はインドの精神史に、寛容の心が脈々と流れているのを知っています。

私はインドの人々に対し、寛容の精神こそが今世紀の主導理念となるよう、日本人は共に働く準備があることを強く申し上げたいと思います。

(中略)

皆様、日本はこのほど貴国と「戦略的グローバル・パートナーシップ」を結び、関係を太く、強くしていくことで意思を一つにいたしました。貴国に対してどんな認識と期待を持ってそのような判断に至ったのか、私はいま私見を申し述べましたが、一端をご理解いただけたことと思います。

このパートナーシップは、自由と民主主義、基本的人権の尊重といった基本的価値

と、戦略的利益とを共有する結合です。

日本外交は今、ユーラシア大陸の外延に沿って「自由と繁栄の弧」と呼べる一円ができるよう、随所でいろいろな構想を進めています。日本とインドの戦略的グロバール・パートナーシップとは、まさしくそのような営みにおいて、要をなすものです。

日本とインドが結びつくことによって、「拡大アジア」は米国や豪州を巻き込み、太平洋全域にまで及ぶ広大なネットワークへと成長するでしょう。開かれて透明な、ヒトとモノ、資本と知恵が自在に行き来するネットワークです。

ここに自由を、繁栄を追い求めていくことこそは、我々両民主主義国家が担うべき大切な役割だとは言えないでしょうか。

インド国会における安倍総理大臣演説『二つの海の交わり』外務省ホームページ

現在の西ベンガル州をはじめとするインド東部とバングラデシュを合わせた地域は、イギリス人によってベンガルと呼ばれるようになった。インド独立時にベンガルは宗教上の理由から二つの国に分かれてしまったが、民族的には同じベンガル人が住む地域である。

私はベンガルで生を受けた一人の人間として、安倍元首相がこの演説のなかで、偉大なるベンガル人、スワームイー・ヴィヴェーカーナンダやタゴール、パル判事らに触れてくれたことをうれしく思う。特に、おそらく現在多くの日本人が忘れてしまっている、ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心の関係について述べてくれたことに感謝したい。

日本とベンガルの関係は、ヴィヴェーカーナンダ、タゴールと岡倉天心、ラス・ビハリ・ボースと頭山満、大東亜会議におけるスバス・チャンドラ・ボースと東條英機、東京裁判（極東国際軍事裁判）でのパル判事と下中弥三郎との交流という両国の偉大な人物のかかわりが、激動の時代のなかで、このアジアの歴史を切り開いた壮大なドラマとして展開されていた。私はこのことを今、一人のベンガル人としての立場から、日本の皆さまに語ってきたいと思う。

なお、インド人名は実際の発音と異なる人名もあるが、一般的に日本でよく知られている表記を採用した。また、二〇〇一年よりカルカッタはコルカタ、マドラスはチェンナイ、ボンベイはムンバイに都市名が変更されたが、本書では当時の呼び方で統一した。

## 目次

はじめに……………3

### 第一章 日本とベンガルの交流のはじまり／13

近代初期の交流……………14

ヴィヴェーカーナンダと日本……………18

岡倉天心のインド訪問……………26

アジアは一つ……………32

天心がインドの民族運動家に与えた影響……………38

### 第二章 タゴールと岡倉天心／43

「現代のルネッサンス人」タゴール……………44

ベンガル・ルネッサンスに与えた天心の影響……………48

タゴールのノーベル文学賞受賞と『ギータンジャリ』……………52

タゴール来日と新たな日印関係の始まり……………58

タゴールが日本に遺したもの……………64

### 第三章 ラス・ビハリ・ボースと日本／69

頭山満、ビハリ・ボース、そしてタゴール……………70

ビハリ・ボースと中村屋……………76

相馬俊子との結婚……………82

### 第四章 受け継がれる「独立」への意志／89

大東亜戦争開戦とインド独立連盟の結成……………90

ビハリ・ボースからチャンドラ・ボースへ……………101

### 第五章 チャンドラ・ボースとインド国民軍／113

日本を動かしたチャンドラ・ボース……………114

大東亜会議で表明したインド独立への決意……………117

大東亜そのものの大東亜戦争……………126

インパール作戦の失敗とボースの死……………131

### 第六章 「バル判決書」の歴史的意義／139

「正義の人」バル判事……………140

なぜバル判事が東京裁判に加わるようになったのか……………143

バル判決が暴いた東京裁判の欺瞞……………149

その後のバル判事と日本……161

## 第七章 バングラデシュ小史／167

イギリス植民地のもとでのベンガル分割……168

インドからの分離とバングラデシュ独立……170

独立後も安定しない政局……177

シエイク・ハシナ政権がもたらした政治・経済的安定……180

## 特別対談 ペマ・ギヤルポメシヤーカー／183

バングラデシュ独立とチベット人……184

日本によるバングラデシュ支援……188

誇り高きベンガル人……193

岡倉天心とタゴールが交流した意義……198

「アジア主義」は正しかった……204

洪沢栄一とタゴール……206

ガンディーとネルーが見たチャンドラ・ボース……210

日印の文化交流がインド独立に結びついた……215

おわりに……221

主要参考文献……228



# 第一章 日本とベンガルの交流のはじまり